

嵯峨遺跡 発掘調査

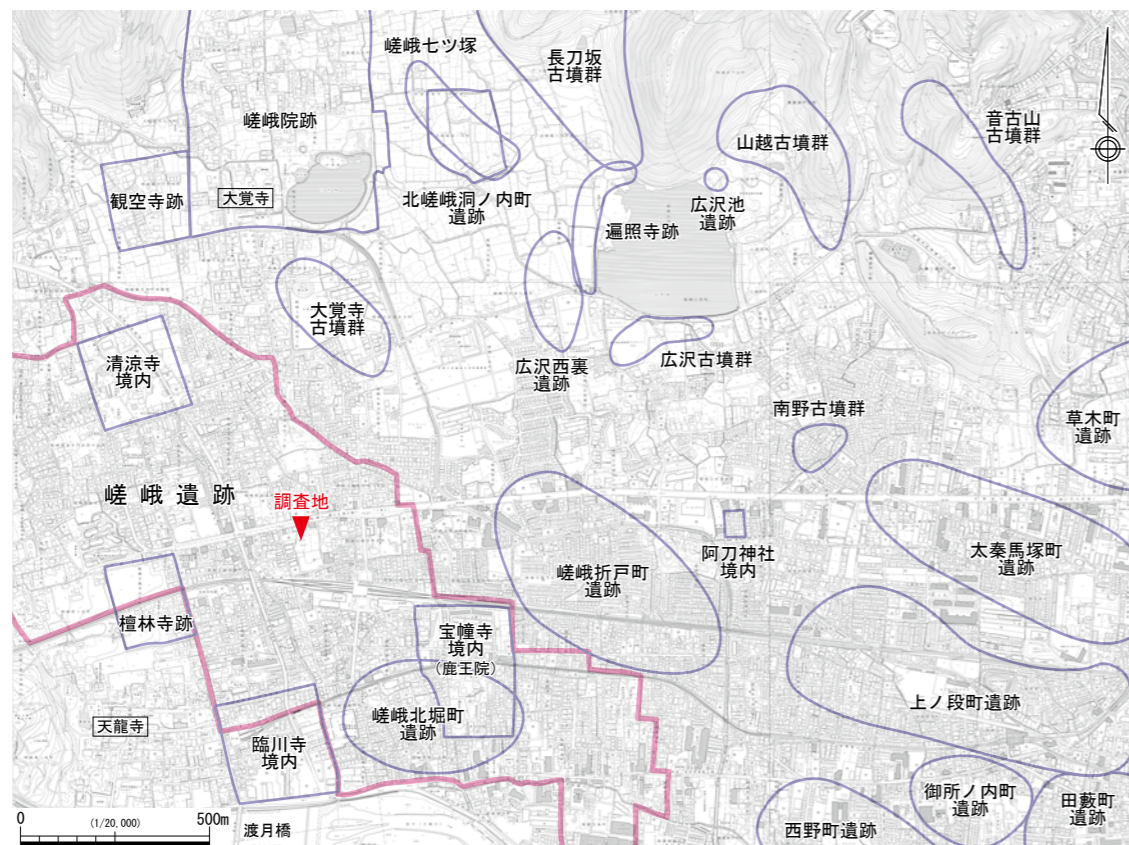
調査地	京都市右京区嵯峨天龍寺若宮町 25-1 他
調査期間	平成 28 年 (2016) 3 月 23 日 ~ 平成 28 年 7 月中旬 (第 1 調査区)
調査面積	約 990㎡ (第 1 調査区)
調査原因	集合住宅建設
計画機関	株式会社 大京
調査機関	有限会社 京都平安文化財

1. はじめに

今回の調査地は、平安時代から鎌倉・室町時代にかけて、天皇の離宮や天龍寺などの大寺院を中心に街区を形成していたと考えられる複合遺跡の「嵯峨遺跡」の一角に該当します。往時の嵯峨街区の南北方向の主要道路である「薄(芒)ノ馬場」と東西方向の「今厨子」(現在の丸太町通)の交点の南東部にあたります。このたび、この地点で計画された集合住宅の建設に伴う埋蔵文化財発掘調査を、京都市の文化財保護課の指導と事業主の協力を得て実施しました。

2. 調査成果

調査の結果、調査地のほぼ全面で 15 世紀から 16 世紀にかけての室町時代後半期、いわゆる「戦国時代」頃のものと考えられる遺構・遺物が検出されました。そして、1 件だけですが平安時代前期の土坑も検出しています。さらに、旧地形と思われる自然に形成された流路(小河川)跡も見出されました。



周辺遺跡における調査地位置図 (1 : 20,000)

応永 33 年 (1426) につくられ天龍寺に伝わる『山城国嵯峨諸寺応永鈞命絵図』によると、調査地付近は「在家」と表示されています。この絵図には、天龍寺、臨川寺、宝幢寺(鹿王院)、清涼寺といった大寺院とその子院・塔頭が多数建ち並び、また「在家」とされる寺院以外の一般民家・商家も数多く営まれている様子が描かれ、土倉・酒屋も多かった室町時代の嵯峨の繁栄ぶりが窺えます。今回の調査では、この絵図に続く時代の様相が判明したことになります。



山城国嵯峨諸寺応永鈞命絵図 (室町時代)

今回検出した 15-16 世紀の主な遺構には、溝状遺構、井戸、掘立柱建物、炉状遺構などがあります。溝状遺構は、調査区西部で L 字状に曲がる「溝 (A)」、南端部では東西方向の「溝 (B)」、中央南半部の南北方向の「溝 (C)」を検出しました。調査区北寄りには比較的規模の大きな石組みの「井戸 (D)」があります。また、調査区東部北半では掘立柱建物の柱穴が多数検出され、数棟の建物があったことがわかります。なかでも柱間がほぼ 1.8m になる柱穴群が見出されました。調査区中央部では 2 件の方形の「炉状遺構 (E)・(F)」が、柱穴群と一部重複するように検出されました。

15-16 世紀代の出土遺物は、ほとんどは破片ですが、多数の土師器皿をはじめ、中国から輸入された青磁・白磁製品、天目碗、瀬戸や備前・信楽・常滑の、おろし皿・播鉢、大甕といった国産陶器類、瓦質の焼物の香炉・火舎(火鉢)・風炉・鍋・羽釜などがあります。その他、室町時代の瓦類や石製硯も出土しています。また、加工痕(切断痕)のある粘板岩片も興味深い遺物です。

今回の調査では、調査区北部で平安時代前期(9 世紀)の土坑を 1 件だけ検出しています(G)。平面形が、ほぼ南北方向になる長方形の土坑で、底部から須恵器の小壺 2 点と土師器皿などが出土しています。状況から、墓であることも考えられます。

3. まとめ

調査はまだ継続中ですが、現在までに判明してきた主な事柄は次のとおりです。今回の調査地で中心となる時期は、「戦国時代」の初めの 15 世紀から 16 世紀にかけてになります。この時期はちょうど「応仁の乱」の前後にあたります。応仁の乱では嵯峨の地も甚大な戦災を被りますが、その後ただちに衰退したのではなく、ある程度復興していた様子が見て取れます。また、紹介した溝や井戸などの遺構からはほぼ同様の遺物が出土していますが、遺構によって若干は遺物種類の組み合わせが異なり、周辺の様子を窺う資料になると思われます。

なお、当調査地ではさらに下層の調査及び、東側隣接地での発掘調査(第 2 調査区)を今年 10 月頃まで継続する予定です。



調査区全景（北から）



調査区全景（南から）



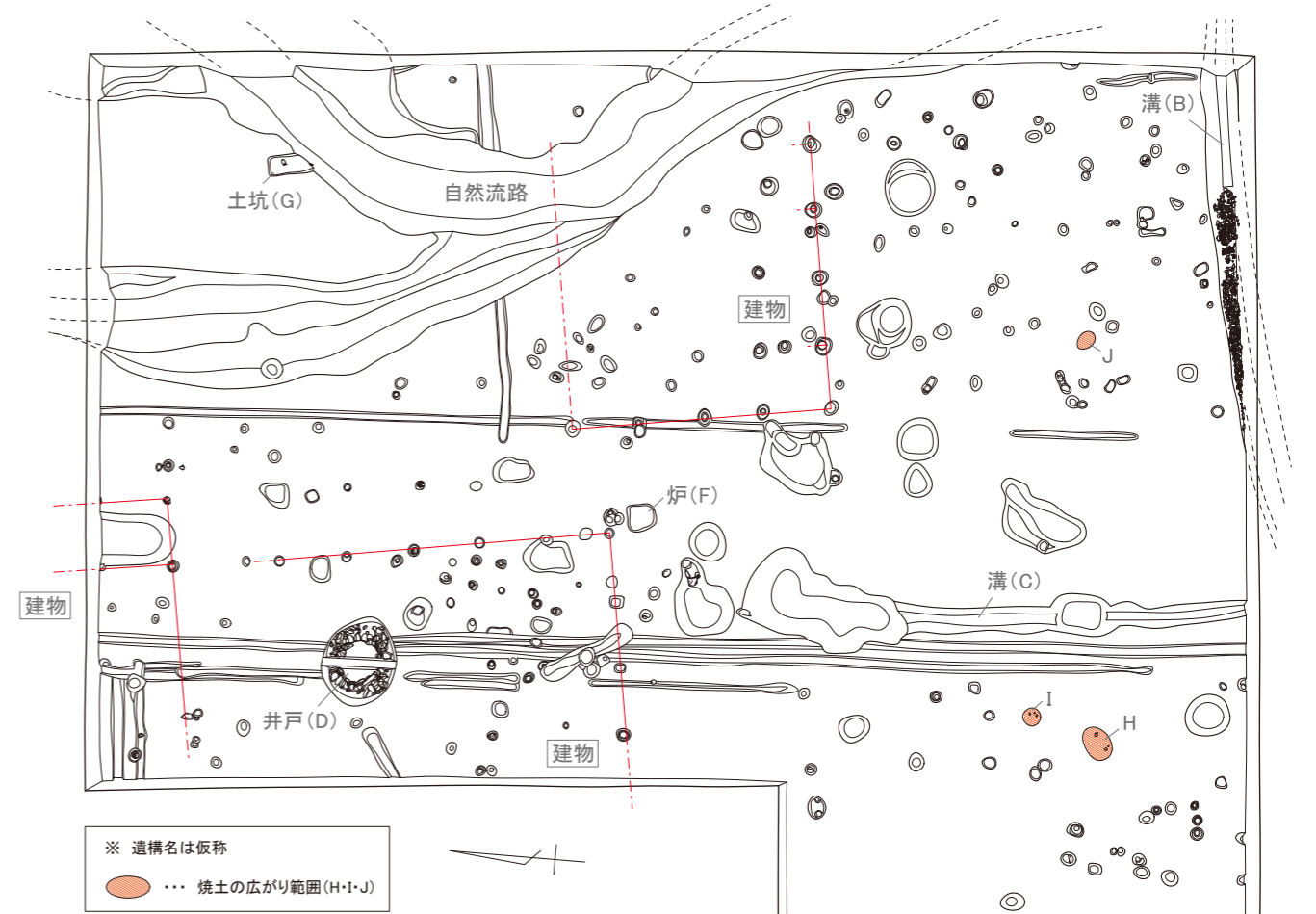
土坑 (G) 全景（西から）



溝 (B) 全景（西から）



溝 (A) 全景（南から）



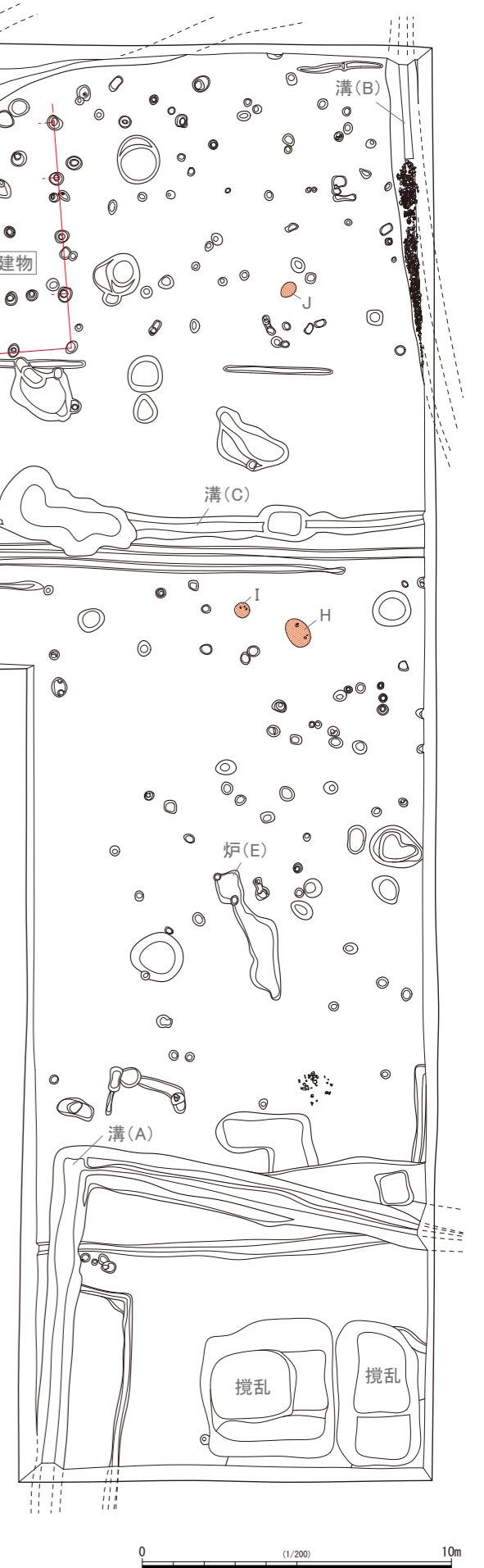
※ 遺構名は仮称
 ● 焼土の広がり範囲(H・I・J)



井戸 (D) 全景（北から）



中国産青磁



調査区平面図 (S = 1 : 200)